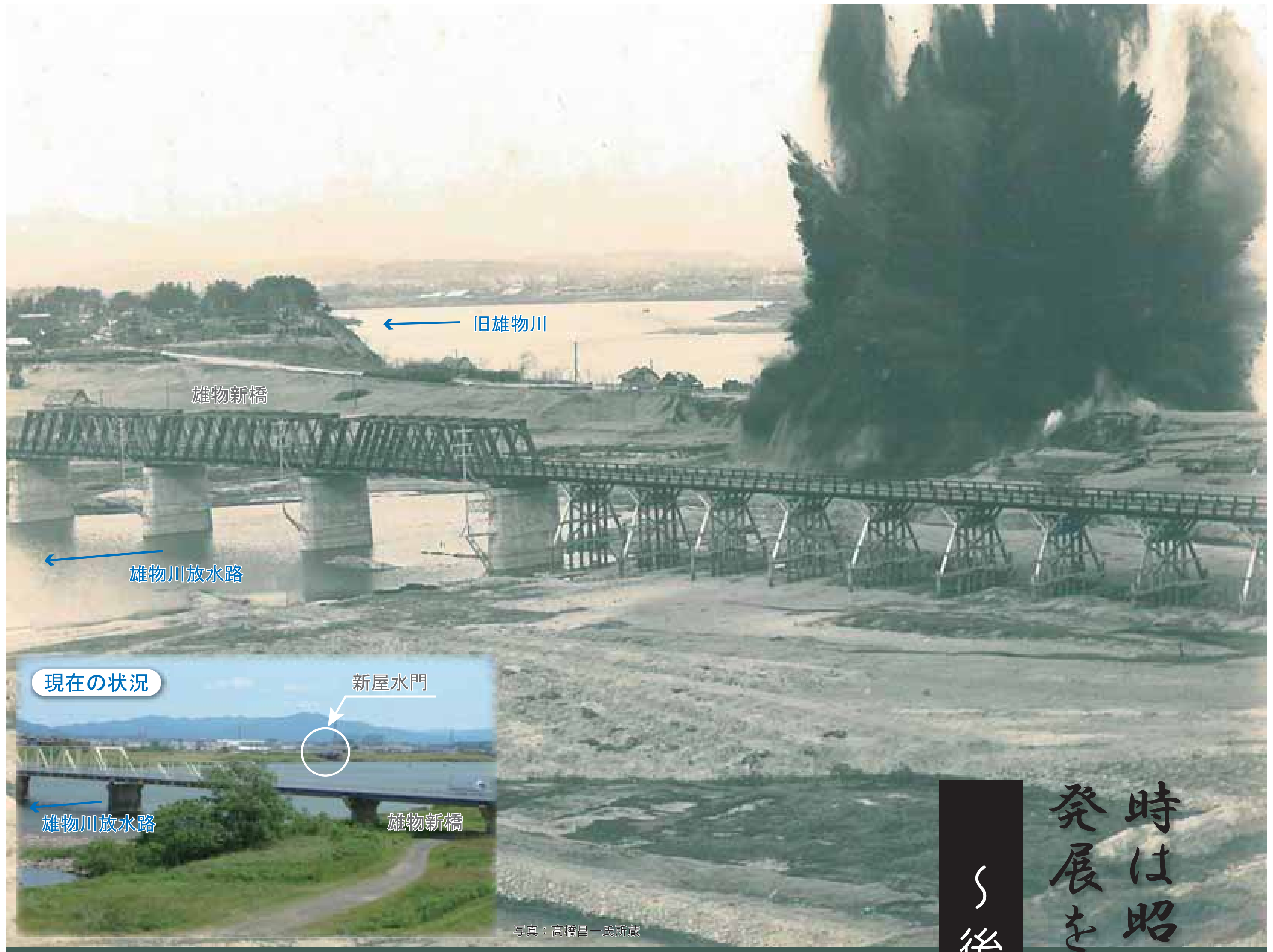


通水爆破の様子（放水路と雄物川の間にあった土堤を爆破により除去し、放水路へと通水しました）昭和13年4月27日

雄物川放水路 通水 70周年

時は昭和初期…地域の発展を担う河川大改修

～後世へ語り継ぐ～

洪水被害多発地帯「秋田市」。発展の鍵は洪水被害を無くすことでした…。

昭和13年（1938）4月27日午後2時40分、雄物川の改修を国に要請してから約50年、工事に着手してから22年の歳月を経て新たな雄物川の出口（雄物川放水路）が完成しました。

平成20年（2008）、放水路通水から70年という節目の年を迎えました。雄物川放水路が伝える先人の偉業と、この大事業によりもたらされた秋田市街地の安全と発展。通水70年の歴史を振り返ります。

洪水多発地帯「秋田市」

雄物川放水路ができる前の雄物川下流部は、大きく蛇行しながら北流し、土崎で日本海に注いでいました。

毎年の大雨時には、秋田市街地や平野の約1/3が洪水による被害を受けていました。低地は洪水のたびに水びたしとなり、秋田市の発展をさまたげてきました。

また、かつての雄物川の河口にあった土崎港では、洪水のたびに流れてくる土砂で港が浅くなり、大型船が着岸できずにいました。

明治43年9月洪水の様子

写真：思い出のアルバム秋田市 明治・大正篇

写真：目で見る秋田の今昔

大正12年4月洪水の様子

新聞に報じられた水害の状況（秋田魁新報/昭和7年8月5日）

秋田魁新報 外號

大豪雨に旭川氾濫 市内各町浸水する

濁流新中島堤防を越す

新中島の二百戸 濁流の中に沒す

阿鼻叫喚の巷と化す

亂打さる、非常信號に 凄惨の氣漲る

川端通り交通を絶ち

新屋地区は、かつて百三段（ももさだ）と呼ばれていました。
（アイヌ語又は大和語の「川の流れ出る場所」という意味）

「出羽一国御絵図」正保4年（秋田県公文書館所蔵）

放水路ができる前のくらし ＜ 楢山のけつ冷やし ＞

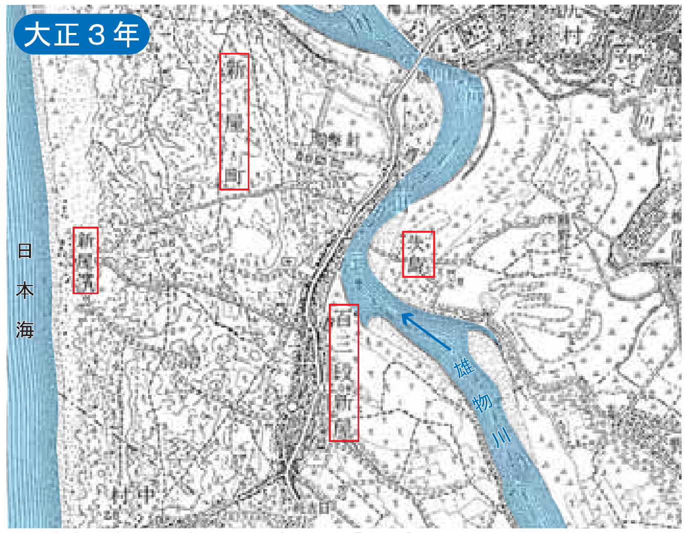
雄物川は、たびたび水害を引き起こす「暴れ川」でしたが、なかでも町内に小舟まで備えていたという楢山地区は、周囲を各支川の氾濫域に囲まれた状況にありました。

『楢山のけつ（尻）冷やし』という言葉が残っているほど、永年水害に苦しんでいました。『楢山のけつ（尻）浸し』という表現も残っています。それだけこの地区は洪水のたびに床上浸水が起こっていたということを表しています。

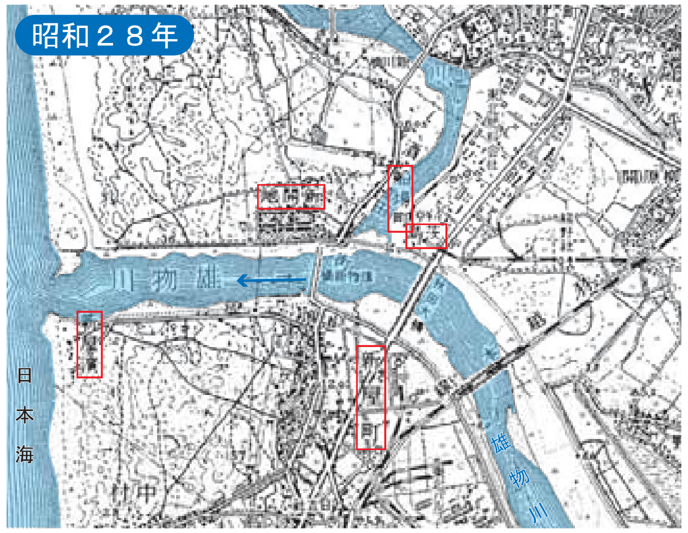
『新しい水路をつくる』暴れ川・雄物川へのチャレンジ

放水路は、河口に近いところで洪水の流れを直接海へ流し出すための人工水路です。

『水害から地域を守る対策として、雄物川河口から上流10km地点で雄物川を閉めきり、新屋から高さ20m以上もの丘陵（砂丘）を掘削し、日本海に放流する2kmの新しい水路をつくる』この驚くような計画が大正３年に打ち出され、大正6年にこの「雄物川を制す」大事業が始まりました。



大日本帝国陸地測量部地形図1/50,000『秋田』大正4年発行



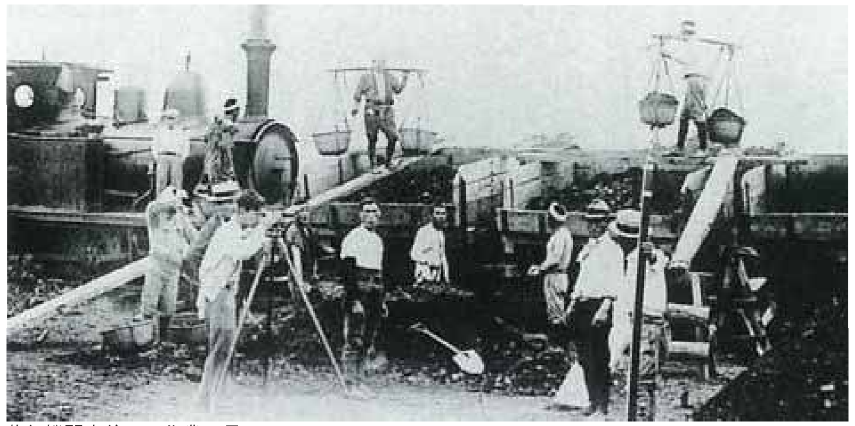
国土地理院地形図1/50,000『秋田』昭和29年発行

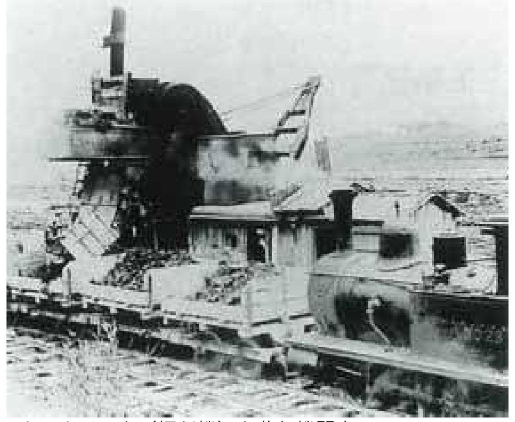
人の手による苦しい作業、そして最新鋭機械の登場！

着工した当初、木のトロッコ、人夫による手作業で工事は進められていきました。土砂を担いで砂山の上に運ぶというような作業で、従事した人夫は延約200万人以上であったとされています（「雄物川改修史」）。
時代の流れに沿って、次第にエキスカベータ（掘削機）等の最新鋭の土木機械等が導入されるようになりました。作業効率が飛躍的に向上しました。

（勝平コミュニティセンター所蔵）

当時の掘削作業の風景
（後ろにはトロッコを押す人夫）


蒸気機関車前での作業風景


エキスカベータ（掘削機）と蒸気機関車

歴史的な瞬間・爆破による通水！

今から遡ること70年。昭和13年4月27日。
遂に放水路へ水を通すための爆破作業が行われました。この世紀の一瞬を見ようと詰め掛けた人は、当時の秋田市総人口よりも多いおよそ4万人。爆破してからしばらくは、あたりに人々の歓声が響き渡っていたといいます。
しかし、水が少なく、土砂を流す力が弱かったため、人夫がスコップを持って待機。爆破後にすぐさま水路を広げて成功を納めました。

『見よ！蘭春の空の下、水も輝く雄物河畔に殺到した四萬人の大群集を！聴け！二百萬人が営々二十二年にわたる大業をけふの日にこめて天に轟く大爆音を！…』

秋田魁新報/昭和13年4月28日

大秋田建設への轟音
日本海へ新動脈
雄物川新放水路の通水
爆破作業成る
営々二十年
轟然起る大爆音
涙と歓呼、拍手の嵐
お、歴史的瞬間
観衆

爆破見学につめかける群衆

通水爆破に集まった群集

爆破スイッチを入れる三島仙台土木出張所所長

雄物川放水路による効果と生活環境への影響

雄物川放水路が開削されたことによる効果として、残土埋立地での工業地帯の誕生、秋田運河の整備などが進み、現在の秋田市の骨格がつくられました。また、洪水による被害が減少し、安心して暮らせるようになったことで、秋田市発展の基礎が築かれました。
放水路事業は秋田市の発展へ寄与するとともに、新屋の分断やハマナス栽培の衰退、海水浴場の衰退など、周辺地域の生活環境に変化をもたらしました。放水路の建設により新屋の町は二分されましたが、新たな雄物川には雄物新橋が建設され、地域の人々にとって分断された町をつなぐ生活の基盤となりました。

昭和20年頃の秋田運河
写真：目で見る秋田の今昔

茨島地区埋立地の工場群（S40年）

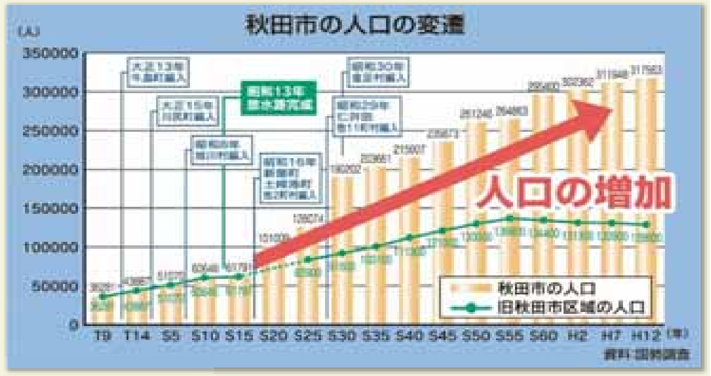
洪水時の雄物川放水路
平成19年9月19日撮影

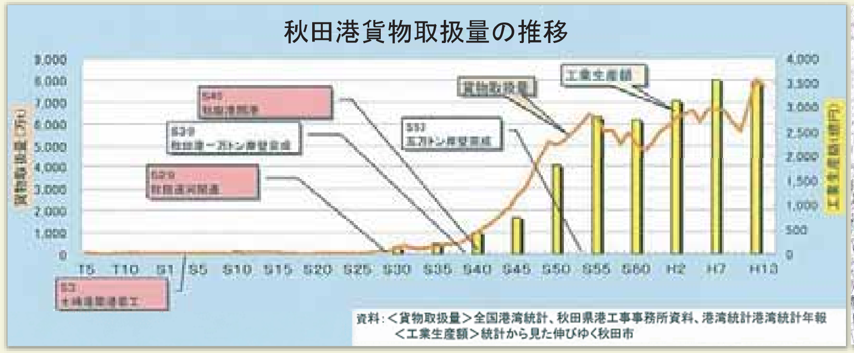
雄物新橋の開通

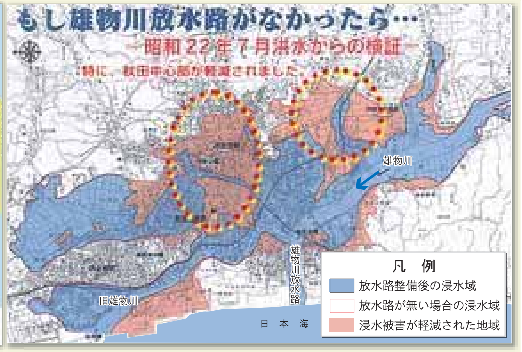
昭和初期の新屋浜海水浴場
写真：改訂新屋郷土誌より

＜ 雄物川放水路の効果 ＞

- 放水路の完成以降、洪水による被害は激減し、秋田市の人口は増加しました。
- 旧雄物川は、秋田運河へと整備されました。
- 運河を掘ったときの土砂を埋立造成し、臨海工業地帯誕生の基礎が築かれました。
- 雄物川放水路事業が、秋田港の築港を可能にしたことにより、岸壁や荷揚場が整備され、大型船やコンテナ船なども着岸可能になりました。
- 放水路を掘ったときの土砂を周辺の低湿地に埋立造成し、茨島や新屋の工業地帯が誕生しました。







問い合わせ窓口
国土交通省 東北地方整備局　秋田河川国道事務所　調査第一課
〒010-0951　秋田市山王一丁目10-29　TEL 018－864－2288　FAX 018－864－5204
ホームページアドレス：http://www.thr.mlit.go.jp/akita/

平成20年6月作成